

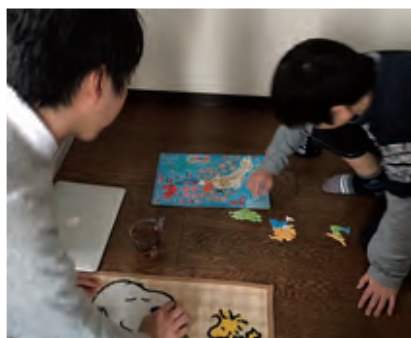
ワーカーズコープの自立支援

このまちで 歩いていく 2017 年度

共に働き、共に生きる

協同労働がつくる地域のかたち

❁ 実践事例集 ❁



日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会

若き用務員のいる保育園 子どもを中心に 育まれる関係性

さきはた
笹幡保育室×せたがや若者サポートステーション(NPO 法人ワーカーズコープ)

◆所在地：東京都渋谷区、世田谷区

ワーカーズコープが運営する渋谷区立笹幡保育室（渋谷わかば地域福祉事業所）では、2016年7月から用務業務を通じ、同じくワーカーズコープが実施するせたがや若者サポートステーションを利用する若者を受け入れ始めた。現在までに、週1日の短時間勤務を体験した若者は5人。そのうち1人は笹幡保育室の組合員となっている。

「用務の仕事が続けたい」

用務の仕事をご提案したのは、笹幡保育室の大石英子園長。笹幡保育室は、3年目まで保育士が時間外で清掃をすることが多く、疲弊していました。若者たちが清掃を中心に用務員として就労し、幅広く園の運営をサポートするようになると、もともと保育の評価の高かった笹幡保育室は、用務業務も含めて評判になります。

保育士の永江光代さんは、「保育士以外の声をかけてくれるお兄さん、お姉さんの存在が、子どもにとってとてもよく、運動会や地域の祭りも盛り上げてくれて、園の中に相乗効果が生まれている」と、信頼を寄せています。

大石園長は、「みんな仕事の価値を自ら見出して、尊敬している。本当にいい顔になった。仲間として共に働き続けたい」と目を細めます。



大石園長



大山さん

火曜日を担当する大山峻也しゅんやさんは、高校生の頃に心療内科に通うようになりましたが、大学に進学すると勉強が楽しく、精神的にも安定していました。

しかし、大学院に進み、学会の発表や論文の締め切り

に追われ、成果もなかなか出ず苦しくなっていました。大好きだった『平家物語』の研究が続けられなくなり、そのショックは大きく、半年間の休養を余儀なくされました。

「働くイメージがわからなかった」という大山さんは、せたがや若者サポートステーションを利用しました。

自信を取り戻そうと、様々なプログラムに参加。笹幡保育室では2016年7月から就労を開始。当初は、16～19時の3時間で、掃除機掛け、トイレ掃除、玩具拭き、ゴミ捨てを終わらせることで精一杯でしたが、今では子どもたちが掃除機のコードに足を取られないよう気を配り、お迎えのインターホンが鳴れば、「お帰りなさい」と対応するなど、保育士の手の届かないところをカバーしています。

「保育士でもない自分に寄ってきて、声をかけ、手を振ってくれる子どもたちの存在が生きがいになっている」と大山さん。「保育士さんたちは、わからないことを丁寧に教えてくれる。みなさん本当に子どもが好きで、一緒に働けることが誇り。徐々に任される範囲が増え、園の仲間になっていくことが喜び」と感じています。

大山さんは、渋谷区内でワーカーズコープが運営する「西原ほほえみ保育室」でも用務を担当。「気持ちが入ってしまっている。用務の仕事が続けたい」と、希望を語りました。

子どもに抱っこをせがまれ…

笹幡保育室は、経理の実務を得意とする組合員がおらず、ずっと苦勞していました。

大山さんは、大石園長から「経理をやってみない？」と声をかけられました。「パソコンの操作を手伝ってもらうことがあり、経理も得意かもしれないと思った」と大石園長。

文系なので得意とは言えないものの、大山さんは1週間考え、「やってみよう」と決意しました。

経理初日、引き継ぎをしてくれるはずの主任の山口文衣さんが、事務所に見当たりません。人手が足りず、0歳児クラスの応援に入っていました。

0歳児クラスへ向かう途中、大山さんは1歳児クラスの子どもに抱っこをせがまれ、保育室に入り、そのまま子どもに促されるようにして、昼食の介助をしたのです。「用務で子どもに声かけをしたり、遠足の引率にも行っていたので、自然に入れた」と振り返りました。

その様子を見た笹幡の仲間たちは、「保育に向いている」と感じました。大山さんは、これをきっかけに週3回保育補助をすることに。火曜日の16時からこれまで通り用務をし、月末と月初は経理を担います。

「いろいろなことをやるんだね」と声をかけると、「何でも屋。何かすごいことになったと思っている」と、大山さん。それを聞いた大石園長は、「そのうち園長もね」と笑いました。

主に1歳児クラスを担当するようになった大山さんは、担任の藤澤映瑠奈さんと永江菜理さんを、「干渉し過ぎず、放っておきもしない。対等に接してくれるのが嬉しい」と信頼しています。

経理も、「新システム導入と賃金改定が重なり大変だったが、最後までがんばれた。すぐに慣れる」と自信をのぞかせました。

大山さんはこれを機に組合員となり、新入組合員研修にも参加。「みんなの意識を共有でき、ワーカーズは働きやすい」と、現場での実感と理念への共感から、働くことの喜びを見出しています。

保護者も共感

若者たちを受け入れてきた大石園長に話を聞きました。



とまどいもあったと思うが、当初若者たちにはばっとした表情も見られた。そこで、「(園児の) 保護者は疲れて帰って来るから、『お帰りなさい。ご苦労様』と声

園の廊下を掃除機掛けする大山さん



をかけてあげて」と伝え、みんなすぐにあいさつするようになり、いきいきし始めた。

保護者には、生きづらさを抱えた若者であることを伝え、「行き届かないことがあるかもしれないけど、よろしくね」と話すと、「そういう仕事もしてるんですね」と共感してくれた。今では、若者たちと子どもとのかわりを見て、保護者も安心しきっている。

保育補助に入ることが増えた若者たちは、子どもから「抱っこして」「食べさせて」と頼られることが嬉しそう。自ら保育補助に入りたいという申し出もあった。「保育が楽しくてしょうがない」という声も耳にしている。

5人の若者が月～金曜日に日替わりで入っているが、休暇を取る人のフォローを、「自分がやる」と名乗り出してくれるようになり、主体性が出てきた。

実際に保育が上手なので、保育士が「子どもをお願い。私が掃除するから」と頼むこともある。保育士は保育だけ、用務員は用務だけという関係性はなくなり、人と人のふれあいが子どもを中心に育まれている。これが本当の仲間だと思う。

若者たちを見ていると、卒園児がつまづいたときに、「ただいま」と帰ってこられる園でありたいと思う。誰もが集える、保育園のコミュニティ化の必要性を、若者たちから再認識させられている。地域に向けて、「みんないっしょい」という場をつくりたい。

(永戸亮「若き用務員のいる保育室」『日本労協新聞』2017年3月25日号、6月25日号、9月25日号をまとめました)

学習支援から見える 家族取り巻く “生きづらさ”

多様な困難 連携で支える

らいふあっぷ習志野^{ならしの}（ワーカーズコープちば 企業組合労協船橋事業団^{ふなばし}）

◆事業内容：生活困窮者自立支援

◆所在地：千葉県習志野市

らいふあっぷ習志野（生活総合支援センター）は、ワーカーズコープちばが、習志野市の委託を受け、2015年4月から運営を開始。生活困窮者自立支援制度の自立相談、家計相談、就労、学習支援を行う。学習支援事業「フリー★スタディ習志野」は、生活保護世帯及び準用保護世帯の中学1年生から高校3年生を対象とし、定員は50人（2017年度）。

“生きづらさ”が学習の障害に

学習支援事業は、主に勉強を教えることで「貧困の負の連鎖を断ち切る」という目的の下に始まっていますが、家庭や生徒自身が経済的な理由だけではない生きづらさを抱え、それが学習の障害になっていることが多くあります。そのため、フリー★スタディ習志野（フリ★スタ）では、必然的に世帯支援へ発展していきました。

困難な事態を解決に導くために地域資源との連携は必須であり、教育機関とも、相談してみれば「実は学校が一番困っていた」ということがわかって、協力して解決に向かうことのできた事例もでてきました。

（事例1 保護者の就労支援も）

学習支援開始当初は出席率100%だった中学2年生の女子。6、7月頃急に出席状況が悪くなりました。この生徒は、1年生の3学期に両親の離婚に伴い転校してきたばかりでした。

保護者に連絡すると、帰宅が深夜0時頃になることもあり心配していたとのこと。10キロほど離れた転校前の学校の友達のところまで、自転車で頻繁に遊びに行っていました。見守る目を増やそうと、学校に連絡し、相談していくことを決め、発達障がい疑いについても、適切な対応をしていくことを話し合っていました。

相談の中で、母親の仕事が夜勤であり、経済状況が悪化していることがわかりました。そこで母親をらいふあっぷ習志野の就労支援につなげ、日中の勤務での就職が実現しました。また借金が明らかになり、法テラスを活用できるよう支援を続けています。

その後、生徒は発達障がいの検査を受け、情緒教育の通級指導を受けるようになりました。陸上部に入学し、冬の市内マラソン大会や中学生大会などに出場し、その成果を報告しに来てくれます。学校では本人の特性がよくない方向に出て、同級生とトラブルを起こすこともしばしばある様子ですが、通級指導の先生が中に入ることでおさまるようになっていきます。困ったときには教室に来て愚痴をこぼし、気が済むとしばらく来ないということを繰り返していますが、学校には休まず登校し、夜遊びの懸念もなくなりました。あとは、3年生なので希望の高校に行き、興味があるというカメラマンになれるよう支援を続けていきたいと考えています。

（事例2 いじめ対応から）

準要保護のひとり親家庭の生徒。申し込み後に面談を行ったところ、生徒にはコミュニケーションに関わる生きづらさがあると感じました。6月頃急に出席日数が減ったので、お母さんに連絡をし、学校でいじめにあっていることがわかりました。SNSで同級生に住んでいる家をぼろぼろだと言われたことが広まったためでした。毎年恒例の学校訪問の際に中学校で確認すると、クラスで話をしているいじめはおさまっているということで、生徒の出席も再開しており、様子を見ることにしました。

2学期に入り、10月頃から再び出席日が減り、11月には来なくなりました。再びお母さんに連絡をしたところ、いじめが再発した様子であると。三者面談を行うと、いじめの再発ではなく本人の心の問題であるとの見解がスクールカウンセラーからあったとのこと。

お母さんには言えないことがあるのではないかと、親

子別々に面談を行いました。生徒が学校に行くことの負担を強く訴える場面がありました。教育委員会に相談し、学校長の許可とお母さんの了解のもと、フリ★スタの出席を学校の出席とみなしてもらうことになりました。

補習も行い、日数を増やして対応しました。すると、生徒は安心したようで、学校に通い始め、生活も落ち着いていきました。第一志望の高校に合格し、今では楽しそうに高校に通っています。

現役大学生の視点

学習支援の申し込みの動機は、そのほとんどが学力の向上にあります。講師は、まず勉強が教えられないと務まりません。現役の大学生は、生徒と年頃も近く、相談しやすい相手でもあります。

フリ★スタでは、ボランティアで多数の学生が関わっており、学生2人は組員員となって働いています。ほかの組員員と同じ土俵で意見交換を行い、同じように責任を持って行動し、同じ給与で働きます。また、その人の得意に合わせて、より責任のある役割を担ってもらいます。例えば、年間行事の企画は、やりたいと手を挙げた人が立案しています。それで失敗することもあります。が、同じ目的に向かって行動し、互いの違いを知り、妥協点を探ることを考え、共に働くことの大切さを知ることが大切だと思います。

次は、大学生で講師の中野佑樹さんの報告です。

（事例3 貧困の連鎖）

「どうするの？ 今月全然来てないけど。来月は何回来るの？ 出席率の目標8割なんだけど、何回来るの？ 8回中何回来るの？ 何回？ 6回？ 分かった。絶対来いよ」——2年目のこの生徒は、5月には、フリ★スタにほぼ1カ月来ていませんでした。その状態に気づき、電話を掛けた時のことです。

彼には、その時、3年生に進級していた2歳年上の兄がいました。一人親家庭で、近くに支援者はいません。母親はメンタルを患って仕事はしておらず、生活環境に課題がありました。そうした中で、兄は高校入試に向け、比較的継続してフリ★スタに通い、見事、第一志望の県立高校に合格しました。一方弟である彼は、兄が卒業すると急に足が遠のき、2015年の夏期講習終わり頃からあまり来なくなり、次の年の5月後半から12月まで、一度も来ませんでした。その間、電話をかけ、家庭訪問



教室のようす

等もし、11月に急に母親から再開したいという連絡があり、12月は来たものの、1月にまた来なくなりました。こちらから働きかけて2月は出席。が、3月は来なくなりました。出席しても、講習終了前の30分程度で、十分な学習時間を確保することはできませんでした。

この背景には、家庭がうまく機能していないことが考えられます。母親が送り出すことができずに、学校でも遅刻・欠席が増えています。人格形成に大切な幼児期に、兄はどんな形であれ、両親がそろっている時期が弟より長くありました。兄は弟にとって父親代わりであり、お手本であり、頼るべき人であることは推測できます。その兄が来なくなった教室に、自分で勉強はできると高をくくっている弟の足が遠のくのは、自然なことなのかもしれません。

貧困の連鎖は、その子が育つ上で、手本となるべき大人が周りにおらず、社会から孤立し、社会の中で成長する機会を失う中で生まれるのだと思います。困窮世帯であっても、仕事をし生活環境を整えようとする家庭であったり、例えば、親が働けない状況にあったとしても、子どもを社会に送り出すことを続けていれば、社会が子どもと親を支援し、育てることができます。

3年目を迎えた今、彼は月に平均1、2回フリ★スタに来ています。現在も、家出やSNSのトラブルなどの問題を繰り返し起こし、そのたびに電話や家庭訪問をしています。しかし保護者が本人に会わせてくれなかったり、本人にも避けられたりします。ですが、困ったときにフリ★スタに再び通うことも繰り返しています。この機会を逃さずにより強固な関係作りをすすめていければと考えています。

（管理者 渡辺伽奈）